



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

出過ぎた杭は打たれない

先日、都内で鍼灸治療を受けた。鍼灸の歴史は紀元前2千年の中国まで遡る。6世紀頃に日本に渡って発展と衰退を繰り返して今日まで、長い歴史を持つ。さまざまな手法が試され、独自に発展し、ひとことで鍼灸と言っても数えきれんくらいの流派が存在する。近年は新しい流派といっても今まであったものから派生したものが多かったんやけど3年ほど前、突如ゼロから生まれた流派が現れて鍼灸界がざわついた。気になりつつも流行病もあって行けず、満を辞して先日その鍼灸院に行ってみた。どういう理論があるのか、この方法をどうやって見出したのか、聞きたいことは山ほどあったけど、そこに行きつく前に話の種になったのは“出る杭が打たれまくってる問題”やった。噂には聞いていたものの同業者からのクレームや嫌がらせが後を断たんらしい。

人は自分の経験と知識でしか物事を判断できんから新しいものに対して警戒心を持ってしまうのは当然。それは自己防衛本能でもあるし。ただ、知らないことを受け入れて知ろうとする気持ちは忘れたくない。それをやってしまうと自分の世界も広がらんし、知らんことだらけ、信じられんことだらけや。批判されても邪魔されても自分たちの考えや手法を信じて貫く彼らの姿はかっこよかったし私もその強さが欲しいと思った。私のやる施術からはかけ離れた流派やけど、彼らの流派が発展し、多くの方が救われることを心から祈る。

(テノヒラkiku)



本日！海日和！！ vol.152

「海のカエル」

6月初旬にこの原稿を書いているのだが、窓の外からは、カエルの大合唱が聞こえてくる。水を張った田んぼで、恋のお相手を探しているのだろう。むせかえるようになった空気とカエルの鳴き声が夏の到来を感じさせる。

顔がカエルに似ていることから、カエルウオと名付けられた魚たちがいる。鱗が小さくのっぺりとした肌もカエルを連想させるのだろう。中には水が苦手な、潮の引いた海岸をピョンピョン跳ね回る強者もいる。

写真は、フタイロカエルウオである。たしかに、ぎょろりとした目玉や幅広い口がカエルに似ている。フタイロの由来は、頭と尾の部分で色が異なるからである。体長7cmほどで、サンゴや岩の隙間に住んでいる。



【フタイロカエルウオ】

尾の鮮やかな黄色が見えるのは、縄張り争いや餌を食べるために巣穴から出てきたときだけである。

環境の悪化によってカエルはどんどん数を減らしているらしい。海のカエルがいなくならないように、豊かな愛南の海を守っていかなければならない。

(撮影地：鹿島)

愛南サンゴを守る会 西尾知照 ともてる